

■ 住職戯言



夏に思う

夏に思う

平成27年7月

本年は、戦後70年の節目に当たります。

春には、天皇皇后両陛下が、パラオを訪問し、
戦没者慰霊をされましたことは、皆様もご存知のことと思います。

実は、昨年、臨濟宗の青年僧のグループが、パラオを訪問し、
戦没者慰霊をいたしました。

その中の一人が、私の友人でございます。その時の感想を。

「戦没者の方々に、私たちは、つつみこまれている。

そして、戦没者の方々から、よく来た、ありがとう、君たちは、
精一杯生きてほしい。と励まされているような気がした。」

と言います。

つつみこまれている。この言葉を聞きました時、私は、臨濟宗の大本山円覚寺の管長猊下で
あった、朝比奈宗源老師のおっしゃる、仏心を思い浮かべました。

「仏心の中に生まれ、仏心の中に生き、仏心の中に息を引き取る」

例えれば、私たちは、仏心という、大いなる命の流れである、
心の海に浮かぶ、泡のようなものである。

とおっしゃいます。

戦没者の仏心は、大いなる命の流れである、仏心に帰っていったのです。
そして、青年僧たちを励ましたのです。

臨済宗の大本山妙心寺の管長猊下であった山田無文老師は、
南太平洋慰霊行で遺族の方々に

「英霊の遺骨は拾っても、英霊が流した
血や肉は拾えない。この島全体が英霊の墓標である。
血や肉が、この島の木々を育てて、大きくなった墓標である。」
とおっしゃられました。

それを聞いた遺族の方々は「お父さん、お父さん、ようやく来ることが
できました。」とヤシの木にとりすがり泣いたと言います。

遺族の方々は、無文老師のお言葉により、大いなる命の流れである
仏心への恩を知り、ヤシの木にとりすがり泣いたのです。

5月24日の朝日新聞の天声人語に、「意外にも多くの兵士が銃を撃っていなかった。」と
ありました。

『戦争における「人殺し」の心理学』というデーヴ・グロスマンさんという方の著した本に、
米軍の調べた結果として載っているそうです。

第2次世界大戦で戦闘中に発砲したのは、全体の15%から20%に過ぎなかったと言
います。

その後、米軍は発砲率を上げる訓練法を開発したそうです。朝鮮戦争では55%になり、ベ
トナム戦争では90%以上になったそうです。

著者は「本来ほとんどの人間には人間を殺すことに強烈な抵抗感がある。」と言います。
戦場は、人の心を壊そうとします。イラクとアフガンの戦争に派遣されたアメリカの兵士2
00万人のうち、50万人が帰還後に精神を病んだそうです。デイヴィッド・フィンケルさ
んが著した『帰還兵はなぜ自殺するのか』という本にその数字が挙げられています。

我が国の自衛隊員も例外ではありません。イラクやインド洋に派遣された隊員たちも戦
場の近くで恐怖や緊張に直面してきました。派遣された隊員のうち54人が帰国後に自ら
命を絶ったと言います。防衛省が5月22日に明らかにしました。個々の原因はわかりませ
んが、派遣と縁がないかどうかもわかりません。

「仏心の中に生まれ、仏心の中に生き、仏心の中に息を引き取る」
例えれば、私たちは、仏心という、大いなる命の流れである、
心の海に浮かぶ、泡のようなものである。と朝比奈宗源老師はおっしゃりました。
大いなる命の流れたる仏心同士が互いを殺しあうことが間違いなのです。

己のうちの仏心を閉ざさなければ、同じ仏心を傷つけようとすることはできないのです。

私たちの心の本来の起源たる仏心を閉ざそうとすれば、源を離れた私たちの心は壊れて
しまいます。

むしろ、仏心は、仏心を生かそうとするのです。

私の祖父は、第二次大戦中、軍医として、中国大陸へ行ってきたと私は、小さいころ聞いたことがあります。戦争の終わりごろ、医学専門学校を卒業して、すぐに招集を受け、中国大陸に送られたそうです。学校卒業直後で、それも繰り上げ卒業のものに、医学的技術などなく、医学の本だけがたよりで行ったそうです。

小さな町のお医者さんとして、皆から信頼され、できないことは、何もないというような祖父からは、私は想像もできない姿です。

しかし、医学的技術など、あってもなくても、同じだったそうです。戦争の終わりごろは、前線に物資などなく、包帯も薬もない状態でした。できるのは、簡単な血止めぐらいだけでしょう、目の前で多くの人々が亡くなっていったそうです。

亡くなっていった人々は、皆、家族の名前を口にし、生きたい、生きたいと言っていたのだそうです。実は、このことは、祖母から聞きました。

戦後、故郷へ帰って来た祖父が、祖母に、今は亡くなった人々におわびと感謝の念しかないと言ったそうです。

祖父から、小さい私が聞いたのは、今は良い時代だ、お前には、そんなことが起きないように願うと言っていたことだけです。

一人一人の仏心は、生きようとしています。そして、大いなる命の流れである仏心は、私たちをつつみこみ、生かそうとしてくれているのです。私たちには、生かされて、生きている恩があるのです。

高見順さんの詩「生と死の境には」を読みます。

生と死の境には
なにがあるのだろう
たとえば国と国の境は
戦争中にタイとビルマの国境の
ジャングルを越した時に見たけれど
そこには別になにもなかった
境界線など引いてなかった
赤道直下の海を通った時も
標識のごとき特別なものは見られなかった
否 そこには美しい濃紺の海があった
泰緬国境には美しい空があった
スコールのあとその空には美しい虹がかかった

生死の境にも美しい虹のごときものがかかっているのではないか
たとえ私の周囲が
そして私自身が
荒れはてたジャングルだとしても

泰緬国境とは、タイとビルマの国境のことです。国と国の境には国境線など、現実には引いてありません。

国境線は、人間が勝手に国と国を区別したものだからです。

国境線のない世界のスコールの後の空には、虹がかかって居たと言います。

高見順さんは生と死も、勝手に人間が区別したものではないだろうかと言います。

生も死も、同じ仏心なのですから、きっと、スコールの後の空の虹のようなものがかかっていることでしょう。

私たち一人一人の仏心は生きようとしています。

その私たちを、生かそうとしてくださっているのが、大いなる命の流れである仏心なのです。

今、私たちは、生かされている恩を知った時、大いなる命の流れである仏心に、感謝の念を持つのです。

そして、戦没者の方々は、今、大いなる命の流れである仏心となり私たちが生かそうとしてくださっているのです。

戦後70年の節目の年です。70年以上の時を経て、今、ここに戦没者の、子、孫、縁者たる私たちはいます。

私たちは、今、ここに生かされていることを感じ取りたいと思います。

そして、生かされていることが感じ取れた時、感謝の念が生まれるでしょう。さらに、私たちの子や孫や縁者が戦争という仏心を傷つけようとする悲劇に巻き込まれないようにとの願いが生まれるのです。